松平忠固の側室おつま夫人 と 山口家

松平忠固（忠優）は姫路藩主酒井忠実の子として生まれ、文政 12(1829)年 18 歳で上田藩主松平忠学の婿養子となって翌年藩主を継いだが、正室との間に子はなかった。忠固には 5 人の側室があり、その一人おつまは、忠固が大坂城代の職にあった弘化年間に最後の側室となった。大坂で最初の子を産み、嘉永元(1848)年に老中に昇進した忠固に従い江戸へ移ってから 4 人の子を産むが、初めての男の子が嘉永 4 (1851)年に生まれた忠厚である。忠固の後を継いで藩主となったのは側室おとしの産んだ嘉永 3 年生まれの忠礼で、忠厚は分家である塩崎分知の松平忠行の養子となって旗本を継いだ。以前ここのサイトに載せたように、私の曾祖父山口慎は明治 5 年、忠礼・忠厚兄弟公のアメリカへの留学に随行した。

おつまの出自について、一般には上田藩士岩間氏夫人とされているが、山口氏夫人とする説もあり、家老同士の抗争を書いた『上田縞絲之筋書』を研究した尾崎行也先生は、山口家はいくつかある、とした上で後者の説をとっておられた。2020 年に『埋もれた歴史』を出版した東郷えりか氏は、早くから私の先祖の山口家に関係があるのではと推測され、上田で「藩家譜」を調べることを東京在住の私に提案くださっていた。全く想像もしなかった話に戸惑っていたが、伝手をたどって尾崎先生から調査のヒントを頂き、ようやく今年 4 月に上田市立博物館と上田市立図書館で調べてみた。その結果、山口家 4 代目で中老の平兵衛が妾との間に設けた子の娘、つまり平兵衛の孫が岩間家の養女となってから忠固の側室となったことが判明した。「岩間氏夫人」と「山口氏夫人」は同一人物だったのだ。

（ただし、当時の女性は名前を表記されず、娘を示す「女」とだけ書かれている。諸先生方の研究による「おつま」だが、私自身はおつまの名前の史料にまだ辿りつけていない。）

「藩家譜」には、この平兵衛の正妻は、代々老中を務めた相模国土屋氏の家臣富田小左衛門の娘とある。妾との間の子、山口進助は平兵衛の次男ではあるが「別出身」と記されており、「明細」では別系統に書かれている。想像に過ぎないが、堅い家柄の妻とは違うタイプの女性に惚れて面倒をみたのかもしれない。当然ながらこの女性の記録はない。

進助は平兵衛が存命中の享和 3 (1803)年に召出され、勘定奉行まで進み、文政 10(1827)年に没した。妻は岩間郡太夫の養女であった。岩間家は山口家と同じような格禄で、どちらも藩主の近くに仕えていたようだ。長男に続いて生まれた女子おつまは、岩間浅右衛門（郡太夫の嫡子）の養女となって藩主忠固の侍女に上がった。それがいつなのか、またおつまの年齢もはっきりしないが、祖母譲りの女性らしさが藩主のお目に留まったのだろうか。

1830 年に藩主となった忠固が大坂城代になったのは弘化 2 （1845）年 34 歳の時で、おつまは弘化 5 年 2 月に大坂城で女子を産んでいる（夭逝)。嘉永となったその年の 10 月に忠固は老中となり、今の皇居前広場にあたる江戸城西の丸下に上屋敷が与えられた。おつまはここで嘉永 3 年に女子を産むがまたも夭逝、ようやく嘉永 4 (1851)年 8 月に生まれた男子が欽次郎、後の忠厚である。翌年には広之丞、嘉永 6 年に直之丞を授かった。このように 6 年足らずのうちに 5 人の子を出産したが、無事に育ったのは忠厚のみであった。(別表参照)

山口進助の長男屯（おつまの兄）は 10 年ほど側勤をして病気のため隠居し、養子の直人が天保 8(1837)年に跡を継いだ。当時二十石三人扶持の広間番で、のちに進助を名乗るこの人はとんでもなくだらしない人物だった。「明細」によると、天保 13(1842)年に「身持ち宜しからず甚だ相済まざる風聞これあり不埒の至り…」で宛行一石取上げになった。嘉永元(1848)年には別所村へ遊びに行き理不尽の始末、「不埒至極、御叱りの上、逼塞（門を閉じ白昼の出入禁止）」となる。しかし 2 か月後には御免となっている。ペリー来航により日本が大きく揺さぶられている安政 2 (1855)年には何度も同様の事で「御叱りの上、差控え」の処分を受けており辟易するが、その都度、七日あるいは一か月で「御免」となっている。

しかも、上田城の北側、二の曲輪を出てすぐの所に家をもらっていることが嘉永 5 年「上田旧城郭絵図面」（花月文庫）と「安政年間　上田城下町絵地図」（上田市立博物館）からわかった。本家筋の山口平太郎の屋敷もその近くにある。藩主忠礼の代になってもまともに勤務できない「不埒」な人物だったようなのに、元治 2 (1865)年には一石加増となって明細は終わっている。おつまの甥ということで甘い処遇を受けていたとすれば、他の者たちはさぞ苦々しい思いだったのではないだろうか。

山口本家の方は、二百五十石の中老だった平兵衛清諦の没した文化 10(1813)年、三男が家督を継いで二百石をもらい、平兵衛清亮を名乗った。だが、この 5 代目はたいへんな酒好きで度々仕事中にも酒を飲んでいたらしく、文政 7(1824)年、ついに「御叱りの上、差控え」の処分を受けた。その後は改心したのか、忠固が養子に来た時には御用掛、藩主となった天保元(1830)年末までは御側頭として仕えている。

ところが、天保 2 (1831)年 10 月 15 日夜、平兵衛は江戸の水道橋近くで本康宗円（この年に法眼に叙せられた奥医師）の一行に出会って口論となり、暴れて忠固の名前を出すなど「不埒至極」、家取潰しとなってもおかしくない事件をおこした。これから幕政に関与していきたい忠固にとって憤懣やるかたないことであったであろう。しかし、「御慈悲をもって格禄取上げ、蟄居隠居」の処分となった。

おつまを忠固の側室にするにあたって、山口家から岩間家に養女にした後という方法をとった理由は、親が別出身だからではなく、この大不祥事のためだったかもしれないと思う。あるいは両方か。弘化 2(1845)年、平兵衛は「格別の思召しをもって蟄居御免」になっているが、ここに平兵衛の姪としておつまの口添えがあったのかはわからない。

父親の不始末により、突然 6 代目として召出された息子は、「親平兵衛のこの度の不埒により家改易となるところだが、祖父平兵衛の年来の勤功により格別の思召しをもって、宛行十石三人扶持、中小姓」という「演説」を受ける。代々の平兵衛の名を継がず、平太郎を名乗った訳が分かった次第である。15 歳の召出しの時にこのような「演説」を読み上げられた平太郎は、家の名誉のため必死に学び務めたであろう。じきに藩校明倫堂の句読師となり、嘉永 5 (1852)年には独礼席、学監となった。

藩政改革派の家老藤井右膳と、江戸での活動を重んじる家老岡部九郎兵衛の対立が激しくなった安政 4 (1857)年には藤井方だった山口平太郎も「御叱りの上、差控え」の処分を受けたが、三十日後に御免となる。

安政 6 (1859)年に松平忠固の没後、忠礼が藩主となり、忠厚は分知（塩崎知行所）の旗本松平忠行の養子となる。この準備の時期から平太郎は分知付きとなり、その後も郡奉行、町奉行、軍事掛、文学校惣司と勤めながらも分知を兼帯している。これは平太郎が忠厚の母おつまの縁戚だったからではないかと尾崎先生は推察されていたが、実際、平太郎はおつまの従弟（いとこ）だったわけである。

さて、慶応４(1868)年、忠礼と忠厚は勤王として恭順を示せと京都へ呼び出され、その折には平太郎の息子の慎が側勤として随行した。このころ平太郎は家老として執政を命じられ、忠礼の婚姻御用掛も務めている。明治２年に忠礼は藩知事に、平太郎は権大参事（副知事）に任じられた。そして、忠礼と忠厚のアメリカ留学が検討された明治４年には修業補佐を頼まれるが、すでに５４才、病気を理由に息子にあとを任せて隠居した。当時26才の慎は忠厚の再従兄弟（はとこ）に当たるわけで、随行者としてただ一人選ばれた理由は文武両道だけではなく、そこにもあったかもしれない。親の不始末により山口家断絶の危機に当主となった平太郎だが、生涯誠を尽くして勤め上げ、息子に後を託せたのは感慨深かったことだろう。

明治５(1872)年７月、松平忠礼・忠厚兄弟と山口慎はニューヨーク近くのニューブランズウィックにあるラトガーズ・グラマースクールへ留学する。当時数十人の日本人がここで学んだが、ラトガーズ大学を卒業できたのはわずか４人、明治12(1879)年卒業の忠礼はその一人で、帰国後は外務省に勤務し子爵となった。忠厚はラトガーズ大学には進まず、おそらく土木工学を学ぶために他へ移ったようだ。この兄弟より早く、慎が明治８年８月に帰国した理由は定かでないが、忠礼から離婚希望の手紙を託されていた。また、忠厚は分家に妻がおり、子はすでに明治２年に亡くしていたが、アメリカ女性と結婚して予定通りに帰国せず、忠礼とは険悪な仲になってしまう。慎は忠厚と手紙を何度もやり取りして送金にも苦労したが、結局、忠礼は忠厚に絶縁を言い渡した。忠厚はアメリカ各地で鉄道や橋梁などの土木工学エンジニアとして有名になり、度々新聞にも取り上げられる活躍をしたが、肺結核により1888年36才の若さでコロラド州デンバーにて没した。

その後の慎の波瀾万丈については以前Wikipediaなど別稿で書いたので省くが、晩年の明治44年頃、突如として松平家から財政困難の立て直しを懇願され、すぐに根室銀行支店長を辞職して東京の松平家に家令として住み込んだ。火の車の元藩主家に自身の僅かな貯えをつぎ込んだところでどうにもならず、病に倒れて大正2(1913)年に亡くなった。

慎の最後の決断について、激動の明治時代に廃藩から40年以上経っても旧主家に対する忠心は変わらないものだったことに以前は驚いていたが、明治12年生まれの長男に固（かたし）と名付けるほど忠固を敬っていた曽祖父の心には、忠厚と血のつながりがあるという事実も根底にあったのだと今回の判明から思う。

私の亡母のエッセイ『プリンス・マツダイラ物語』(2004年)をこのサイトに昨年アップさせていただいたが、この繋がりは母にも全く思いもよらなかったはずである。母の写真に報告しながら、感情豊かだった反応を想像している。

【参考文献】

尾崎行也「文久期における上田藩（一）」『信濃』第35巻 第12号

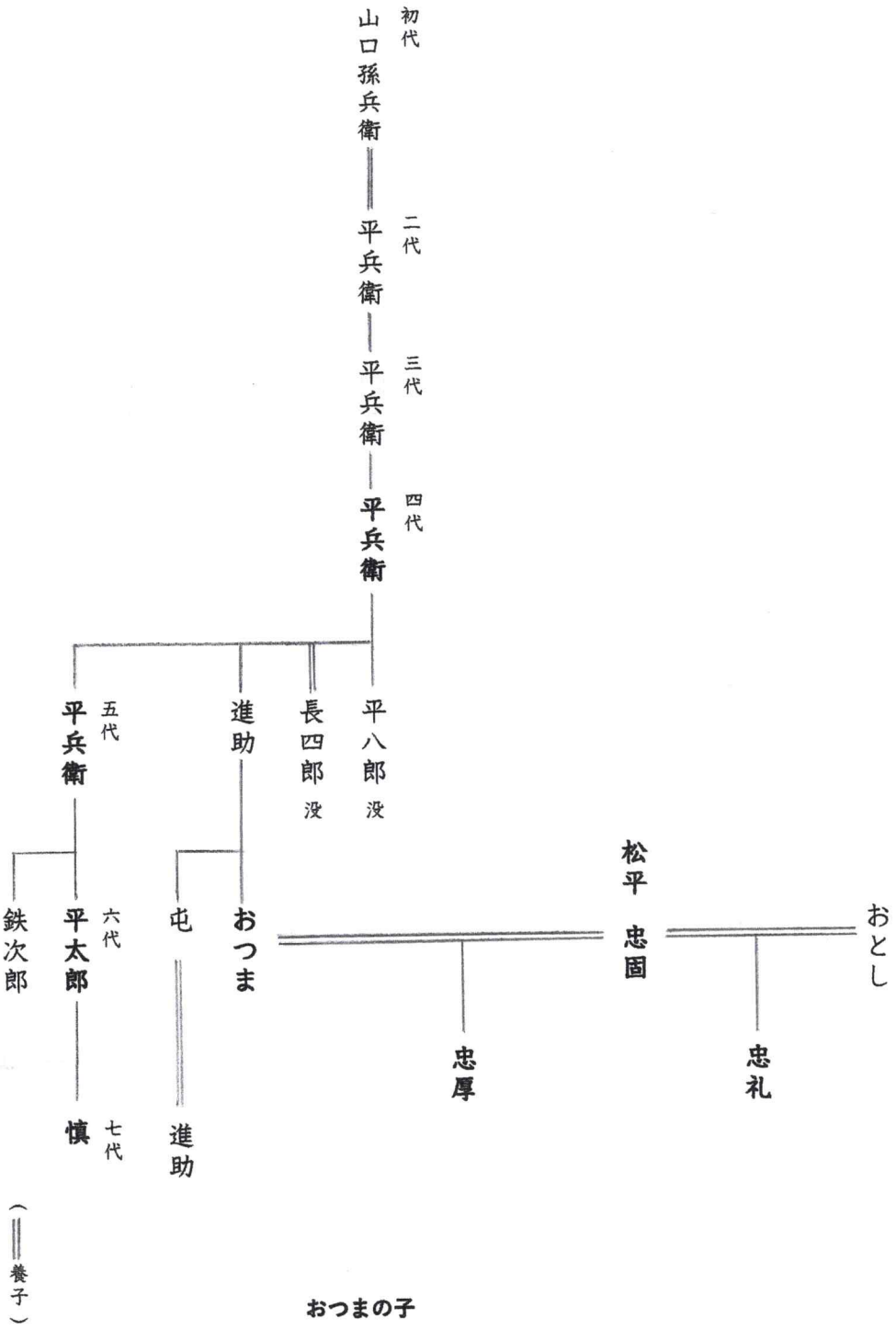
古文書学習会山なみ・上田市立図書館「幕末藩主暗殺疑獄 - 『上田縞絲之筋書』を中心に」

小宮山千佐「上田藩主松平家の妻妾（上・下）」『信濃』第59巻 第10 - 11号 2007年

寺島隆史「上田藩主松平忠固の側室と子女について」『上田・小県』第94号1993年

松平家文書「藩家譜」、「明細」、中村家文書（上田市立博物館蔵）

「藩鑑略譜」（上田市立図書館蔵）



おつまの子

①女・徳	弘化5(1848)2/4	～ 嘉永元(1848)8/21	6ヶ月
②女・保	嘉永3(1850)8/5	～ 嘉永４(1851)5/8	9ヶ月
③男・忠厚	嘉永4(1851)8/14	～ 明治21(1888)1/24	36歳
④男・広之丞	嘉永5(1852)9/10	～ 嘉永６(1853)6/5	9ヶ月
⑤男・直之丞	嘉永6(1853)8/14	～ 嘉永７(1854)6/2	10ヶ月

保、広之丞、直之丞は忠固と同じ東京芝の天徳寺に墓所があった。

〔中村家文書441と寺島隆史氏の論文（上田・小県第94号）より作成〕